2025 年度 事業報告

【2025(令和 7)年度 重点目標】

社会や保護者のニーズを再確認し、社会に貢献できるスカウトを育てるための仕組みを確立する。

～より良き社会を創るために、社会地域においてリーダーシップを発揮できるスカウトを育てる～

Ⅰ　総括

2025 年度は、公益財団法人ボーイスカウト日本連盟の中長期計画、および県連盟創立 70 周年の「茨城県連盟の未来のための取り組み」の提言を受けて作成した「茨城県連盟中期計画（５カ年計画）」を基に、下記の基本施策を挙げ事業に取り組んだ。

【基本施策】

1　茨城県連盟をより活気ある組織にする
2　県連盟事業の再編・適正化に関する取り組みを進める
3　多くの人に開（拓）かれたスカウティングを目指す
4　スカウトの成長・社会課題の解決に貢献するスカウティングを目指す
5　より良き指導者の育成に尽力する
6　全てのスカウトが楽しく・愉快に活動できる団・隊活動を支援する

1　茨城県連盟をより活気のある組織にする

団や隊を地区や県連盟が支援するという、ボーイスカウト本来の組織の在り方を目指し、ボトムアップの組織改革を進めた。隊・団・地区・県連盟のすべてにおいて、活発な意見交換や提案ができる組織作りを目指し、地区委員長会合を定例化し県連盟の行う事業に対して現場の声を反映させるよう努めたほか、地区開設定型外訓練を新設し、団・隊の指導者のニーズに即した研修を実施し、成果をあげている。第 21 回茨城県キャンポリーでは実行委員としてローバースカウト４名を加え、大会運営においてもローバースカウト・ベンチャースカウトの活躍の場を設けた。

2　県連盟事業の再編・適正化に関する取り組みを進める

県連盟と地区の役割分担を見直し、県連盟の事業を精査し、県連盟が主体となって取り組むべき事業と地区が主体となって取り組んだ方が効果的な事業に仕分けし、地区への移管を進めるとしたが、十分な精査ができたとはいいがたい。指導者研修おいては、地区の人材を開発する視点から、地区が主催する定型外訓練を新設し、県連盟がそれを支援する体制を作り実施した。

3　多くの人に開（拓）かれたスカウティングを目指す

スカウト運動の認知度を高め、この運動に多くの子どもたちが参加できるよう、ワクワク自然体験あそびやボーイスカウト体験、入団説明会などをすべての団で開催することを目標とし、ほぼ実施できた。単独での開催が難しい団では地区で合同開催するなど、各地区で地区の実情に合わせて展開することができた。

情報発信の強化では、広報誌 SCOUTING 茨城を２回、カレンダーを作成し関係各所に配布したほか、組織内情報誌 Ibaraki Scouting News Letter を６回発行した。またホームページの充実に努めた。

4　スカウトの成長・社会課題の解決に貢献するスカウティングを目指す

ビーバースカウト・カブスカウト部門ではＩＢグランプリを、ボーイスカウト・ベンチャースカウト部門では第 21 回茨城県キャンポリーを開催した。９年ぶりとなる茨城県キャンポリーでは、スカウト・指導者 304 名が参加し、186 名のビーバースカウト・カブスカウト・指導者・保護者等が見学に訪れるなど、盛大な大会が開催できた。各地区が合同隊で参加し、複数班による競いあいや協働などスカウト教育法の効果を実感できる大会となった。2026 年８月の第 19 回日本スカウトジャンボリーに向けて大きなステップとなる大会であった。

ボーイスカウト部門ではＧＢのつどいや救急法講習会を、ベンチャースカウト部門ではベンチャーラリーを、ローバースカウト部門では災害支援募金活動や交流キャンプ開催し、スカウトの発達

段階に合わせ経験を積み、成長を促す活動を展開した。

５．より良き指導者の育成に尽力する

指導者研修については、ボーイスカウト講習会を４回、県定型訓練・定型外訓練を５回開催した。ＷＢ研修所スカウトコース茨城第９期が参加申込少数のため中止となったのを含め、予定した指導者研修 11 回中、３回が中止となった。スカウトコースについては近隣各県連盟とも参加者の減少に苦慮しており、2026 年度からは北関東３県連盟での持ち回り開催とすることとなった。

今年度より実施した地区開設定型外訓練は、多くの指導者が参加しており、団・隊指導者のニーズに合わせた研修を、より近い場所で参加しやすい時期に実施することが重要であることを示している。

６　全てのスカウトが楽しく・愉快に活動できる団・隊活動を支援する

スカウトの活動の場は団・隊であることを再確認し、団・隊がスカウト教育法を活用しつつ楽しく、愉快な活動が展開できるよう、県連盟と地区が支援する体制を整えつつある。少人数隊においては地区内で合同隊集会や合同キャンプなどにより班制教育などスカウト教育法が効果を発揮する場を作ることができている。

Ⅱ　本年度の取り組み　※Ⅳ-1-①などの数字は５ヵ年計画の事業番号（5 ヵ年計画はＨＰ参照）

１．理事会

(1) 理事会への 20 代指導者の登用に向けた取り組み（Ⅱ-3- ②、Ⅳ-1-①、Ⅴ-2- ①、一般③、一般④）

・青年代表理事を県連盟規約に規程し、2026 年度総会で１名増員を目指した。

・ＡＩＳポリシーの研究を進め、団委員長講演会、指導者のつどいでＡＩＳに関する学習会を実施した。

・地区委員長会合を定例開催し、県連盟と地区の報告・連絡・相談体制を強化に効果があった。

(2) 多くの人に開かれたスカウティングを目指す取り組み（Ⅰ-2- ①、一般②）

・ワクワク自然体験あそびを始めとするスカウト運動の理解促進を図り、加盟員獲得につながる活動に対して経費補助やグッズ提供などの支援を行った。

・高萩スカウトフィールドが所在する高萩市において、高萩第２団を発団した。

・県連盟が各団に発する情報は、ほぼ時間をおかずホームページに掲載できている。全団がデジタル発信コンテンツを持つまでには至っていない。

・2025 年 12 月 31 日現在で 1,431 名（前年同月比 98.49%）、スカウト数 794 名で目標を達成した。

(3) 財政基盤の確立（Ⅱ-3- ①、Ⅴ-1- ①、一般①、一般⑦）

・日本連盟維持会員は 2025 年度新規に 16 件（2026 年 1 月末）獲得し、日本連盟が茨城県連盟に対して示した目標金額は達成できた。

・県連盟の事業の精査はできていない。

理事会での活発な議論がされるようになり、各種委員会やコミッショナー、トレーニングチーム、事務局等の活動を精査し、相互に連携が取れるよう調整・指示・支援を行うことができた。登録者数も前年同月比 98.49%（日本連盟全体 95.91%）と下げ止まりの傾向を見せている。日本連盟維持会員については地区の協力により、目標を達成することができた。県連盟の予算を有効に活用するために、事業の精査と配分の見直しが次年度の課題である。

２．地区代表理事（地区委員長）

(1) 楽しく・愉快な団・隊活動の支援（Ⅰ-2-②、Ⅵ-1-①、Ⅵ-1-②）

・県キャンポリーにおいて地区で隊を編成し、事前訓練など合同活動を各地区で実施した。

・ＩＢグランプリ地区大会を開催した。

・少人数の隊が増えている現状に鑑み、合同隊集会や合同キャンプなどの計画・実施を支援した。

(2) スカウティングの楽しさを広める取り組み（Ⅰ-2- ③）

・すべての地区・団でワクワク自然体験あそびやボーイスカウト体験、入団説明会などの活動を開催した。団単独で開催が難しい場合は、地区開催や地区内他団の協力のもとに開催して

いる。

(3) 次世代の指導者を育成する取り組み（Ⅱ-3- ②、Ⅳ-1-②）

・地区内の指導者のニーズをもとにした地区開設定型外訓練を、すべての地区で開催した。若手の指導者を講師として登用した地区もあり、育成に貢献した。

・ＡＩＳポリシーの研究を行い、「指導者の集い」への参加促進や地区内での研修会を実施した地区がある一方、情報を流すにとどまっている地区もある。

今年度は第 21 回茨城県キャンポリーの開催年度でもあり、地区での合同隊での活動が高まった。その結果、多くの指導者・スカウトのもとで行う楽しいスカウティング実践の機運を高めることができた。県内ほぼすべての地区・団でワクワク自然体験あそびやボーイスカウト体験、入団説明会が実施されており、加盟員の新規獲得に寄与している。地区開設定型外訓練はすべての地区で開設されたが、テーマが偏るなど改善が望まれる。今後は、地区内団数の減少を踏まえて、地区を超えた合同行事の必要性を検討していく必要がある。

３．総務委員会

(1) 茨城県連盟をより活気ある組織にする取り組み（Ⅰ-1-①、Ⅰ-2-⑤、Ⅱ-1-②、一般③、一般⑤、一般⑥）

・団委員長のための講演会をＡＩＳをテーマに行った。参加人数を増加させる対策として事前アンケートを行い、意識の向上を図ったが、参加者は 18 名で、引き続き対策を検討することとした。また、団委員(長)セミナーをテーマ「ワクワク自然体験あそびの工夫と効果的募集方法」として行い、実践例をもとに研究を行った。参加者 16 名であった。

・ボーイスカウト振興茨城議員連盟の議員を第 21 回茨城県キャンポリーに招待して交流を図った。また、茨城県連盟維持財団との懇談会を 2026 年３月に実施した。

(2) 県連盟事業の再編・適正化に関する取り組み（Ⅱ-3-②、一般①、一般②、一般④、一般⑧、一般⑨）

・災害復興支援奉仕手続きのフローチャートを作成し、ローバー協議会に提示した。今後はローバー協議会が 2024 年度来実施している「能登半島災害支援」活動時の実際の動きを参考に検討していく。今後、「災害発生場所」・「災害規模」などのケース別にマニュアルを作成する方向で次年度も継続する予定。

・「役員選考委員会」規定案を理事会に諮り、修正のうえ承認を得た。また、学識経験理事に関する県連盟規約改選案を理事会に諮った、

・「団における危機管理マニュアル」の作成については、県連盟が作成した「安全危機管理マニュアル」で対応することとした。

・第 21 回茨城県キャンポリーでは、全国共済農業協同組合連合会茨城県本部からの協賛金を活用してキャップを製作し、キャンポリー参加者へ配布した。

総務委員会の定型研修である「団委員（長）講演会」や「団委員（長）セミナー」を実施し、講演会では各団が抱えている後任の指導者確保・育成について最新のＡＩＳ資料を基に解説を行い、セミナーではワクワク自然体験あそび・体験集会の実例を紹介し、加盟員増加の方策を探った。特に、スカウトが大きく減っている団の解決策を探った。両研修の参加者はいずれも 20 名の目標に達せず課題を残した。次年度は県連総会時に団委員長懇談会を開催予定で、団がかかえる問題点やスカウト増員につながる対策案などについて意見交換を行いたい。

４．地域連携・広報委員会

(1) 地域連携の推進(Ⅰ-2-①、Ⅰ-2-④、Ⅱ-1-④)、一般⑥、一般⑦、一般⑧）

・他団体・地域と連携したプログラムの展開として、高萩スカウトフィールド活用事業として親子デイキャンプを高萩市教育委員会他と連携して開催し、地域の子供達・家族（７組 18 名）に自然体験活動を提供した。奉仕者は指導者 12 名、ローバースカウト５名であった。全国防災キャラバンは、本年度は実施を見送った。

・機関紙 SC-IB NEWSLETTER にて各地区の地域連携を含む活動状況を共有し、地域奉仕活動への積極的な参加の奨励や地域行事・お祭りへのコラボや奉仕の促進を図った。また広報誌「SCOUTING 茨城」にて対外的な広報にも取り組んだ。

(2) プロジェクト展開の支援（Ⅰ-2-③、Ⅱ-1-②、Ⅱ-1-④、一般③、一般④、一般⑤）

・「SC-IB NEWSLETTER」による「スカウトの日」の呼びかけを行い、実施結果を掲載した。
・撮っておきの写真コンテスト・カレンダープロジェクトを実施し、カレンダーは 12 月末に発行した。
・ワクワク自然体験あそびや募集活動の推進とノウハウの共有を図るため、「SC-IB NEWSLETTER」にて活動への呼びかけ、実施結果の掲載を行なった。ポケモン連携事業の情報共有、参画の呼びかけも併せて実施した。募集活動のノウハウ共有化に関する各団/地区へのノウハウ提供依頼は次年度に繰り越しとした。
・ローバースカウトの活動の姿を地域の保護者・子どもたちに示す活動では、「SC-IB NEWSLETTER」でのローバースカウトの広報支援や活動状況紹介、高萩スカウトフィールド活用事業での親子デイキャンプや IB グランプリ県大会の広報業務への奉仕依頼等、ローバースカウトの活躍の見える化を支援した。

(3) 県連盟機関紙「SC-IB NEWSLETTER」、広報紙「SCOUTING 茨城」の発行(一般②、Ⅰ-1-②、Ⅰ-2-⑤、Ⅱ-2-②)
・「SC-IB NEWSLETTER」は隔月で定期発行中。「SCOUTING 茨城 Vol.55」を 10 月に発行、vol.56 を１月に発行した。

機関誌「SC-IB NEWSLETTER」で県内のスカウト活動や情報を共有する取り組みは軌道に乗ってきているが、多くの投稿を戴ける様に更に呼びかける必要がある。撮っておきの写真コンテスト・カレンダープロジェクトでも応募への対応は各地区や団でかなり偏りがある。この点も改善を図っていきたい。2024 年度事業の母親世代タスクチームのフォローアップとして、各地区への説明会開催を打診したが開催できていない。スカウト運動の活性化の一助として、スカウティングの楽しさと魅力を地域の人々や子供達に広く発信し続ける事を引き続き課題と捉え、具体的な施策に落とし込み、継続していきたい。

５．指導者養成委員会

区分	研修名	回	実施日	目標人数	実績人数
日本連盟定型訓練	ＷＢ研修所スカウトコース	茨城第９期	中止	18	
	ボーイスカウト講習会	第 85 回	4/13	25	20
		第 86 回	中止	25	
		第 87 回	9/7	25	26
		第 88 回	3/8	25	24
県定型訓練	安全危機管理基本		4/6	10	6
	安全危機管理 STEP1		9/7	10	4
	安全危機管理 STEP2		11/1	10	5
県定型外訓練	WB研修所を100％楽しむためのスキル研修		中止		
	スカウティング＋セミナー「デンリーダーの役割の勉強会」		7/6	15	15
	スキルアップセミナー「野営法」		9/21	15	7
地区開設定型外訓練	すき間時間におけるゲーム	第１地区	9/28		8
	CS 部門のプログラムプロセス	第２地区	6/28		16
	少人数でもできる BS 部門プログラムプロセス	第３地区	11/16		9
	ＲＴ・プログラムプロセス	第４地区	5/31		18
	ＲＴ・ハイキング	第４地区	10/11		12
	楽しいプログラム開発	第５地区	10/5		4
	愉しいハイキング	第６地区	1/25		13

指導者養成委員会が運営面を行う各研修については特に大きな問題は無く行われた。４月の早い時期に行われる研修は地区の総会等、各指導者が忙しい為、出席が難しいとの意見が多くあり、検討してほしいとの要望があった。前向きに対応したい。安全危機管理研修の参加条件を見直してほしいとの要望があった。各指導者のニーズに合った研修内容を目指すため丁寧なニーズの把握を行うことが必要であるとの意見が多く次年度に活かしていきたい。さらに、参加意欲を引き出すため開催時期、告知の工夫などコミッショナー、トレーニングチームと考えていく。地区開設定型外訓練の目的の１つであったトレーニングに若手指導者を登用する事について、講師経験の無い指導者を講師に起用し、良い結果を出すことが出来た地区もあった。次年度も各地区開設の研修は継続する。

６．進歩委員会

(1) 進歩状況を適切に管理し、菊章・隼章・富士章への進級を推進する（Ⅲ-1-②、一般②）
- 2025 年度は、富士章２名、隼章１名が取得した。富士章１名が３月の赤坂東邸（秋篠宮皇嗣殿下）表敬訪問に参加した。

(2) 救急法講習やＧＢのつどいを開催する（一般①、一般②）
- すべての指導者・スカウトが救急法をマスターするという県連盟の指針に基づき、スカウト救急法講習会を２回（７月、11 月）実施し、計 21 名のスカウト・指導者が履修した。地区における救急法上級講習の開催の支援には至っていない。
- ＧＢのつどいを開催し、ＧＢとなるスカウトのモチベーションの向上を図った。スカウト 29 名が参加した。

(3) 「進歩制度　～その理解と活用のために～」の活用（Ⅲ-1-②）
- 隊指導者に進歩制度の理解促進を図る取組み、団面接、地区面接等を通じて、スカウト・保護者にこの運動の目指すところを理解してもらう取組みを継続して実施している。

今年度富士章が２名取得に至ったことは大きな成果である。隼章・菊章を取得するスカウトの増加は、ベンチャースカウトやボーイスカウトのモチベーション向上に大きく寄与することから、地区と連携して支援する体制を整えていきたい。

７．イベント国際委員会

(1) 様々な団体や地域と連携したプログラム（Ⅰ-2-①）
- 各団での実施している一般や独自の取り組みを調査して取りまとめ、相手先や参加形態を紹介して他の団でも展開するためのヒントとした。

(2) 国際感覚を養うプログラムの整備（Ⅲ-1-④）
- 各団での実施している独自の取り組みを調査して取りまとめ、他の団でも展開するためのヒントとした。
- 2027 年にポーランドで開催される第 26 回世界スカウトジャンボリーの情報を各団に提供した。参加希望の派遣隊指導者１名、スカウト 14 名、ＩＳＴ２名の面接をおこなった。

(3) 環境活動、社会貢献活動、ＳＤＧｓプログラムの推進（Ⅲ-2-②）
- 各団での実施している一般や独自の取り組みを調査して取りまとめ、相手先や参加形態を紹介して各団での展開のヒントとした。

(4) スカウトにとって魅力あるスカウティングの実現を目指すイベントの開催（Ⅱ-2-③、一般②、一般③、一般④）
- ＩＢグランプリ 2025 県大会を開催した。県大会エントリー数は、Ｂクラス 42 台　Ｃクラス 93 台　Ａクラス 22 台、デザイン賞 170 台、参加者数はスカウト 150 名、指導者 50 名、保護者 100 名、スタッフ・奉仕者 33 名であった。
- 県大会に先立つ地区大会でのエントリー数はビーバー部門 93 台、カブ部門 220 台、一般部門 50 台で目標を達成した。
- 実行委員会（スカウト 10 名）を組織し、９月から８回の実行委員会を開催し３月にベンチャーラリー2025 を開催した。ベンチャースカウト 15 名、指導者 7 名が参加した。

(5) 日日の善行運動の推進（一般⑤）
- 日日の善行の意義について、再度確認し、日常生活の中で実践できるよう、意識を高めていく必要がある。

地域と連携したプログラム、環境活動等社会が求めるプログラム、国際感覚を養うプログラムについては　各団の実施している内容を調査しまとめた。ボーイスカウト運動の認知や普及に努めていくためのひとつの方法として各団で活用してもらいたい。ＩＢグランプリ県大会については年々盛り上がっており、地区大会のエントリー数もほぼ目標を達成できた。ベンチャーラリーについては実行委員によるスムーズな運営ができたが、実行委員会への参加が低調であったことなど、課題もあり、次年度は改善していきたい。

８．信仰奨励専門委員会

(1) スカウトが信仰を深める活動を奨励する（一般③、一般④）
・Scouting News Letter に信仰に関する記事を連載し、指導者が信仰への理解を深める一助とした。

(2) 信仰に関するプログラム実施の奨励と支援（一般⑤）
・宗教法人との交流懇談会は開催できなかった。「宗教章取得協力宗教法人」の情報については、日本連盟からの情報をすみやかに各団に周知した。

(3) 第 21 回茨城県キャンポリーでの信仰関係プログラムを実施（一般⑤）
・「信仰の時間」を設け、３宗派の教導者を招いて体験の場を提供した。

第 21 回茨城県キャンポリーおいて「信仰の時間」を開催したこと、Scouting News Letter に信仰に関する記事を連載していることは、すべてのスカウトが信仰心を育む一助となった。次年度はスカウトの宗教章取得を支援する取組みを検討したい。

９．県コミッショナーグループ

(1) スカウティングを正しく理解した、魅力＆実力のある指導者の育成のための研修の研究（Ⅰ-2-②）
・ｅラーニング併用型ボーイスカウト講習会を開催し評価を分析した。あわせて動画などのオンライン研修素材開発をトレーニングチームとともに実施した。
・各地区コミッショナーにて指導者の研修ニーズを調査し、コミッショナー会議で県連盟として取りまとめを行った。次年度の研修計画に反映させていく。

(2) 保護者等に対して、スカウティングの理解を促すための研究（Ⅰ-2-⑤）
・保護者への情報発信などを実施した。

(3) 団・隊組織のあるべきイメージの提示と、ＡＩＳポリシーにもとづいた団・隊指導者位置づけの確認（Ⅱ-1-①）
・ 団指導者には「団におけるジョブ・ディスクリプション」、隊指導者においては「隊指導者のためのＪＯＢブック」等を活用した、ＡＩＳポリシー活用ツールの運用に向けた各地区コミッショナー向け運用方法の説明会を開催した。
・ＡＩＳポリシーの研究を行い、団への周知を進めるため、「指導者のつどい」を開催し、その中で学習会を開催した。

(4) スカウトにとって魅力あるスカウティングの実現に向けた研究（Ⅱ-2-③）
・日本連盟が提供するプログラムヒント集の活用方法について、各地区コミッショナー向けの活用方法の説明会を開催した。

(5) 国際交流海外派遣事業の基盤整備（Ⅲ-1-④）
・各地区などで実施している国際交流行事の共有を実施した。

(6) 災害時に有用なスキルを習得するためのプログラム開発のための調査（Ⅲ-2-①）
・現在開催されている救急法講習会などの内容を参考に、必要なプログラムの開発を継続して行っていく。

(7) ビーバースカウト・カブスカウト部門からの上進率を高めるプログラムの検討と展開（一般③）
・タスクチームによる検討は未着手である。コミッショナー定例会議などで継続して検討していく。

(8) 楽しい「スキルトレーニング」を展開し、その活用を促して、スカウト・スキルを更に身に付けようという意識を促し、上級訓練への参加意識を高める研究（一般⑤）
・指導者が進んで参加できる料理技能研修と指導者交流を目的とした指導者のつどいを６月に

開催した。

県コミッショナーグループでは、団・隊中心の体制づくりを進めつつ、指導者研修の充実を図った。指導者ニーズ調査などは前進が見られた。ＡＩＳポリシーについては説明会や学習会を開催し、理解促進を進めた。プログラムヒント集の活用説明も地区コミッショナー向けに行われた。また、スキルトレーニングの見える化として料理技能研修や指導者交流の場を設け、参加意識の向上を図った。全体として、研修関連は進展があった一方、いくつかの重点項目は来年度以降への課題と考えていく。

10. 地区コミッショナーグループ

(1) 楽しく・愉快な団・隊活動の支援（Ⅰ-2-②、Ⅱ-2-①、Ⅲ-1-②、Ⅵ-1-①、Ⅵ-1-②）

・各地区でポケモンとのコラボイベントや合同スケートイベント、ナイトハイク、キャンプ、スカウト祭り、合同隊集会などを実施している。

・ラウンドテーブルを定期的に開催し、指導者の資質向上と活動情報の共有を図っている。

・進歩制度の理解を促進し、菊章・隼章・富士章を目指すスカウトの意識の向上を図った。

(2) 団・隊指導者の成長を助ける研修の場とインサービスサポートの提供（Ⅳ-1-② 、一般⑤）

・団・隊指導者の研修ニーズを把握し、地区に必要な研修を定め、トレーニングチームと連携してすべての地区で地区開設定型外訓練として実施した。

・団・隊指導者の奉仕歴や研修歴を把握し、適切な時期に声掛けを行い、上級訓練の意義やその効果について理解を促し、参加を奨励するよう努めた。第２地区２名、第４地区１名、第５地区１名が上級訓練に参加した。

・複数の地区でＡＩＳに関する説明会を開催したほか、ラウンドテーブルなどでＡＩＳ関連のセミナーへの参加を促している。

地区コミッショナーグループでは、全スカウトが楽しく活動できるよう団・隊を支援し、指導者の成長を促す研修会の企画等を実施。各地区では、合同イベントを実施しその支援を行った。ラウンドテーブルでは、ＡＩＳやプログラムプロセスなどをテーマに指導者の資質向上と情報共有を進めた。全体として、活動支援と研修は概ね実施されており、地区ごとの特色が見られる一年となった。

11. トレーニングチーム

(1) 指導者が参加したいと思う各種訓練の研究と計画・実施（Ⅳ-2-②、一般①、一般②）

・日本連盟リーダートレーナーが中心となって研修の目的・目標を確立し、指導者が参加したいと思い、他の指導者に参加を勧めたい研修となるよう研究を進めた。

(2) 時代の変化に合わせた研修方法の研究（Ⅳ-2-①、Ⅳ-2-②、一般①、）

・ＩＣＴを活用した研修方法を研究し、オンライン研修のためのコンテンツを製作した。

(3) トレーニングチーム員の養成と資質の向上（一般④、一般⑤、一般⑥）

・地区が主催する研修において、トレーニングチーム員以外の指導者を講師として登用し、将来のトレーニングチーム員候補として養成を行うとともに、ディレクターチームを強化し、地区における研修について状況把握の方法について検討した。

・トレーニングチーム研究集会を３回開催した。

トレーニングチームではチーム員の資質向上を目指し、トレーニングチーム研究集会を３回開催した他、日本連盟のトレーナー研究集会に９名が参加した。ＩＣＴを活用した研修方法の研究では３つの研究チームで動画教材の開発を行い、チーム員のスキル向上に寄与したが、有効な研修手段となりうるかについては、今後研究していく必要がある。

12. ローバースカウト協議会

(1) 積極的にローバースカウトに対して参画を促し、年度末には積極的に実働するスカウトの倍増を図る。（Ⅲ-2-②）

・第 21 回茨城県キャンポリーにおいて、茨城ローバースカウト協議会（以下「茨ロー会」）オリジナルグッズを作成・販売し、被災地支援に係る必要資金を集めた。また、水戸駅および守谷駅の２か所において、災害被災地復興支援を目的とした募金活動を実施した。

・茨ロー会交流キャンプ「Link up」を実施し、９名のローバースカウトが参加した。

(2) 県連盟主催の事業に対して奉仕を行い、延べ 15 名以上の奉仕実績を達成する。（Ⅰ-2-⑤、一般①）

・ＧＢのつどい６名、第 21 回茨城県キャンポリー13 名、親子キャンプ５名、ＩＢグランプリ県大会３名、ボーイスカウト講習会２名のローバースカウトが奉仕した。延べ 29 名の奉仕実績となり、目標としていた延べ 15 名以上の奉仕実績を達成した。

(3) ベンチャースカウトやボーイスカウトとの縦のつながりを深め、茨城県連盟全体の活性化をめざす。（Ⅰ-2-⑤、一般①）

・第 21 回茨城県キャンポリーにおいては、ベンチャースカウトと共にプログラムを展開するとともに、キャンポリーナイトを協力して盛り上げるなど、部門を越えた連携を図ることができた。

・ＧＢのつどいではコミッショナーと協働し、計画から参画して、運営の中心となり活動することができた。

ローバースカウトの参画促進と交流の拡大を目標に、被災地支援活動や交流キャンプを実施し、新たなつながりの形成と活動基盤づくりを進めることができた。県連盟主催事業への奉仕も継続的に行い、目標としていた奉仕人数を達成するとともに、各部門との連携を図る機会にもなったと考える。今後も継続して県連盟主催事業へ積極的に参画していきたい。また、継続的に実働するスカウトを増やすため、参加しやすい体制づくりや情報発信を強化し、活動の定着とさらなるローバースカウト活動の発展をめざしたい。

13. 事務局

(1) 事務の効率化（Ⅴ-1-①、一般①、一般②、一般③、一般④）

・事務局業務の適正化と県連盟ルールの再確認を行い、出欠管理、理事会運営、会員・委員会との連絡体制を整理した。連連盟ルールの遵守に向け、事務局内での確認と共有を行った。

・受信メールの確認・分類・保管、添付ファイルの確認の徹底を継続的に行った。会議資料や出欠確認をメールで進める運用を定着させた。

・備品管理に着手したが、委員会間での共通認識形成には至っていない。青少年会館３階倉庫の整理を進め、各委員会資材も含めた整頓を継続して実施している。

・新ホームページを開設し、運用を開始した。内容の充実は途上であり、今後も更新・改善を進める。

(2) 県連盟事業の円滑な執行を支える取り組み（Ⅰ-2-③、一般②）

・ワクワク自然体験あそびなどスカウト募集につながる団の支援を実施した（のべ 18 個団）。

・各委員会の県連盟事業運営について、事業が円滑に進むよう、委員会との連携・調整を実施した。

(3) 外部団体等との連携（一般⑥）

・各団体との情報交換・協力体制を維持し、連携を強化した。

・土浦野営場および土浦市との土地借用関係の整理を行い、野営場閉鎖に伴う後片付けを完了し、借地を地主へ返却した。土浦市との防災協定に基づき、防災訓練へ参加した。

2024 年度に引き続き、ＩＣＴ活用と事務手続きの簡素化を推進し、事務効率化を図った。理事長を補佐し、茨城県・高萩市・ボーイスカウト振興茨城議員連盟・全国共済農業協同組合連合会茨城県本部・ロータリークラブ第 2820 地区・県連盟維持財団など、外部団体との連携を円滑に進めた。　ＩＣＴ活用や事務手続きの見直しにより、事務効率化が進展するとともに、外部団体との連携強化により、県連盟の活動基盤が安定化してきている。野営場移転・資材整理という大きな課題に対し、関係者が協力して対応を進めることができた。今後も、事務局として県連盟事業を支える体制整備を継続する。

14. 土浦県連盟野営場対策チーム

(1) 土浦市青少年の家及び隣接する県連盟野営場にある資材の移動

・土浦市青少年の家の廃止・取り壊しに伴い、大型コンテナ１台をつくば市へ移転した。使用不可・不要資材については処分し、研修資材は青少年会館倉庫および高萩スカウトフィールド

へ移動した。今後の資材配置については継続して検討していく。

(2) 新県連野営場候補地の検討

・県連盟維持財団および関係自治体へ働きかけ、つくば市・小美玉市など、関係者からの情報提供を受け、候補地を視察した。研修事業に支障が出ないよう、継続して検討していく。

土浦野営場については資材の移転と処分、土地の返還が終了した。新野営場については、利用頻度や費用対効果をよく検討していくこととした。